

Performing Arts Review (15)

命懸けで愛した初戀のクラスメートとの再会 映画「草原の輝き」(*Splendor in the Grass*)

平成21年7月22日 中野希也

真夜中、河の畔に停めた車の中で二人は固く抱き合い息が出来ないくらいキスを重ねる。彼が更に求めると彼女は泣き出す。彼は傷つき車から飛び出し岸に佇む。彼女は放心状態で車の中に座っている。やがて彼は車に乗り込みドアを荒々しく閉め全速力で発進さす。男の名前はバッド、女はディーニー、カンサスの田舎町の高校3年生、時は1920年代。

ディーニーが帰宅すると母親が待っていた。

「遅かったわね。バッドと会っていたのでしょう。あの年頃の男の子には気をつけるのよ。お父さんは私と結婚するまで手も握らなかったけれど。明日からはもっと早く帰ってきてね。取り返しのつかないことになったら大変だわ。お休み。」

バッドの父は小さな石油発掘会社を経営しており、自宅で従業員と酒盛りの真っ最中。入ってきた彼を見つけ「ディーニーと一緒にいたんだろう。いいか、ヘンなことをしたら、お前は結婚しないとイケないのだぞ。明日からはフットボール練習にもっと力をいれるのだ。お前はキャプテンじゃないか。俺の夢はお前をエール大学に行かせ会社を継いでもらうことなのだ。女のことなんか忘れてしまえ。」

翌日いつものように手をつないでキャンパスの中を歩く。生徒全員の注目の的だ。彼女の家に送って行きさようならのキスをしたあと裏庭の木陰。切羽詰ったトーンで言った。

"Now admit it....Tell me you love me. Tell me you can't live without me. Admit it"

"I can't live without you..."

"And you'd do anything for me, anything that I asked you to do...anything"

"I'd do...anything...for you..."

The reality of her tone is suddenly deeply felt by Bud.

"Oh, Deanie, I didn't mean to hurt you."

"You didn't...."

バッドは父親に打ち明ける。

「今すぐにディーニーと結婚したいんだ。」

「なんだと。」

「僕は頭は良くないし、とてもエールになんか入れそうにない。近くの農業学校に行く。」



毎日、ディーニーのことで頭が一杯で気が狂いそうだ。」

「いいか、よく聞け。俺も男だからお前の気持ちはよくわかる。そういうのは他のどうでもいい女とすますのだ。」

「そんなことできないよ。ディーニーをととも愛している。」

「若いうちは人生がわからない。まず、エールを卒業するんだ。そのときでも、まだ彼女を愛していたら結婚していいぞ。新婚旅行にヨーロッパをプレゼントするぜ。約束する」

彼は何事にも身が入らず、バスケットの試合でもミスが続きコーチから叱られ、歴史の教師からはエールに入るには、もっともっと勉強をしないといけないと言われる。

新年のパーティのあと彼は言った。

「僕たちは、もう会わないほうがいい」

「バッド、どうしてなの」すすり泣きながら家の中に入った。

黄昏時、バッドは練習の帰りに手に一杯買い物を持って歩いている同級生の女の子に声をかける。いつも目立つ服装を着て派手な化粧をしている娘だ。

「家まで送っていいかい」

「ええ、お願い。でも私を乗せてくれるなんてはじめてね。ディーニーに悪いわ」

「いやあ、いいんだ」

車で向かったのは河の畔であった。いつもディーニーとよく来た処だった。

「ここはやめよう。もうすこし先に行こう」車を止め手をとって林の中に消え、そして・・・

国語の時間、教師がワーズワースの詩を朗読したあと、これは何を言おうとしているのでしょうかと教室の中を見渡しぼっと外をみているディーニーを当てた。

「ディーニー、これはどういう意味だと思いますか？」

「えっ、先生、な、なんて仰いました？」

「もっと身を入れて聞かないといけません」

「ごめんなさい」

「さあ、380 頁を開いて読んでください」

*Though nothing can bring back the hour
Of splendor in the grass, glory in the flower.*

*We will grieve not, rather find
Strength in what remains behind*

はた、草には光輝、花には栄光ある
時代を取り返すこと能わずととも何かせん。

われらは悲しまず、寧ろ、

後に残れるものに力を見出さん。

「よろしい！ さあこの詩人は *splendor in the grass, glory in the flower* に、
どんな意味を込めたか言ってごらん」

やっとの思いで言葉を絞り出しながら

「あのう、若い間はものごとを理想的に見る、でもワーズワースは、(涙を必死にこらえながら) いつかその理想を忘れなければならない、そして、ち、ち、か、ら、を……」
突然大声で泣き出し教室から飛び出す……慌てて教師が後を追う。

彼女は保健室で手当てを受け落ち着きを取り戻す。

母親は夕食に彼女の好物を揃えたが、ディーニーは食べようとしない。

「一体どうしたの？」

「とても食べることができない。勉強も手につかないわ。友達顔もみたくない。もう死んでしまいたい！」

「まあ、バッドと何かあったの」

Deanie. (*Hysterically*) Spoil? Did he spoil me? Ho, ho!!! That's good. No I'm not spoiled!! I'm not spoiled at all. I'm just as fresh and virginal as the day I was born. Oh, I'm a lovely, virginal creature who wouldn't think of being spoiled. (*Shouting at her mother*) I've been a good little, girl, good little girl. A good little, good little girl. I've always done everything Daddy and Mom told me. I've obeyed every word. I hate you...I hate you. I hate you.

三ヶ月後の卒業パーティで二人は久しぶりに会った。以前と同じようにドライブするが、お互いぎごちない気分が漂う。ディーニーは煙草を口に持った。バッドは驚いて

「ほんのこの二、三週間よ。ママはなんにも言わないわ。あのね、バッド」

「ああ」

「なぜ私を避けているのか分かったの」

「その話はよそう」

「私はこの二ヶ月間ずっと家にいたのよ。ずっとずっと考えていたの、気が狂うくらいに」

「僕もどれほど電話をしようかと思ったんだ」

「まあ、そうだったのバッド。嬉しいわ」

「でも、今までのような付き合いではとても我慢できない。僕は抑えることができない」

「(バッドの腕を掴んで) 私は変わったのよ。今までの私とちがうわ。さあ、私を連れて行って！ここでもいいわよ！さあ、したいようにして。もう離れるのは絶対いやよ！」

「ディーニー、車の中に入ろう」

「(大声で) いや！外にいるわ、一緒に！さあ」



「それは駄目だよ」
「ど、どうして！私がきらいになったの？」
「君はいつもと違う。プライドを失ったようだ」
「プライド？そんなものないわ！何をされてもいいの、どうなっても構わないわ、いっそのこと、死んでしまいたい」 こう叫んで林の中に駆けていく。
「ディーニー！ディーニー！」と後を追ったが見失った。

公園のパトロール員が息せききってディーニーの家に来て言った。
「お、お宅のお嬢さんが水中に流されている・・・」
直ちにバッドは河畔に戻り、飛び込んで暗闇の中を泳いだ。「ディーニー！ディーニー！」
捜索隊の声が聞こえた。「あっ、ダムの上にいるぞ」

医師は精神不安定と診断し、親にこの町から離れた大きな病院で療養することを薦めた。
4年の月日を経て、やっと医者は一時的帰宅を許した。大喜びで訪ねてきた親友に
「ねえ、バッドはどうしているの？是非会いたいわ」親友と母親は顔を見合す。
「でも、私たち彼がどこにいるのか知らないわ」そのとき父親が窓の外を見ながら言った。
「いま郊外の農場で暮らしているぞ。」親友の運転する車で向かう。

Deanie and Bud look at each other.
Deanie. Hello, Bud!!
Bud. Hello, Deanie, long time no see!
Deanie. Yes-a long time.
Bud merely holds her hand in his. Both seem relaxed.
Bud. It's good to see you, Deanie.
Deanie. Thanks, Bud, it's awfully good to see you.
Bud. *(Trying to be lighthearted)* Hey, wanta meet my wife and kids?
Deanie *wasn't expecting this.*
Deanie. Of course...
Deanie. Are you happy, Bud?
Bud. I guess so, Deanie. I never ask myself that very often though. How about you?
Deanie. I...I'm getting married next month.
Bud. Are you, Deanie?
Deanie. Yea, a boy in Cincinnati.
Then she dares to look at him.
Deanie. I think you might like him.

Bud. Things work out awfully funny sometimes, don't they, Deanie?

Deanie. Yes, they do.

Bud. I hope you'll be awfully happy, Deanie.

Deanie. Like you, Bud. I don't think much about happiness either.

Bud. What's the point? You gotta take what comes.

Deanie. Yes.

They stop. They're at the car.

Bud. Goodbye, Deanie.

Deanie doesn't answer. She starts to get back into the car. Then he calls her again.

Bud. Deanie!

She turns and looks at him. He goes close to her..

Bud. I'm...I'm awfully glad to see you again, Deanie.

Deanie. Thanks, Bud.

He takes her hand again and squeezes it warmly. She smiles and gets into the car.

Deanie. (Sense of wonder) I don't know. He is a totally different person to me now. I'd always worshiped Bud like he was a god. But all this time he's been a man, hasn't he? Like other men all over the world, trying to get along.

*Though nothing can bring back the hour
Of splendor in the grass, glory in the flower.*

We will grieve not, rather find

Strength in what remains behind

映画 Splendor in the Glass 製作1961年

監督 Elia Kazan, 脚本 William Inge, 主演 Natalie Wood, Warren Beauty

テキスト 「スプレンドー イン ザ グラス」編注 浅田寛厚 金星堂 1973年初版

劇中の詩は、William Wordsworth (1770-1850)が1803-06に書いた

Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood

(幼年時代を追想して不死を知る頌歌)。

以下、「ワーズワース詩集」(田部重治選訳 岩波文庫1938年)より引用する。

彼は英国の生んだ最も偉大なる自然詩人であった。恐らくは自然のために自然を歌った唯一の詩人であったろう。多くの詩人は自然を生けるものとして歌っているが、彼ほど真に

それを信じていた詩人はないように思われる。そして彼の自然への愛は人間をも愛せしめた。何となれば、彼には人間は自然の一部であったから。従って彼の最も愛した人間は自然の間に生きた最も自然的な人間であった。

作者はプラトンの思想を土台として、人間の靈魂は前世の神の世界から来たもので、この世に住むにつれ、追々、それを忘れるに至るのだが、深い内省によってこの信仰を恢復することの出来ることを説いている。

今日、五月のよろこびを 全心に感ずるものよ、
かつて輝やかしかりしもの、 今やわが眼より永えに消え失せたりとも、
はた、草には光輝、花には栄光ある 時代を取り返すこと能わずとても何かせん。
われらは悲しまず、寧ろ、 後に残れるものに力を見出さん。
今迄あり、将来もあるべき 本能的同情のうちに、
人間の苦しみより迸り出る 人の心の和らぐおもいのうちに、
死を通じて永遠を見る信仰のうちに、 賢明なる心をもたらす年月のうちに
それを見ん。

*Feel the gladness of the May!
What though the radiance which was once so bright
Be now for ever taken from my sight,
Though nothing can bring back the hour
Of splendour in the grass, of glory in the flower;
We will grieve not, rather find
Strength in what remains behind;
In the primal sympathy
Which having been must ever be;
In the soothing thoughts that spring
Out of human suffering;
In the faith that looks through death,
In years that bring the philosophic mind.*

